

学校点描 +

プラス

たぶん次の号で、今年度のたよりも最終号になりそうです。15の春も56の春もみんな冬を乗り越えた春に出逢えます。

《K中学校》

NO.17

R5. 2. 16

担当：校長

2月4日（土）に地区冬季卓球大会が開催され、N・Tさんが優勝。H・Kさんがベスト8に輝きました。

12日（日）に開催された草刈杯でも、N・Tさんが優勝しました。

2月12日（日）に開催された、ジュニアアルペンスキー東北決勝大会Y予選会女子大回転でS・Kさんが3位に輝きました。

2月8日（火）から、全国中学校スキー大会が長野県野沢温泉村で開催されました。男子5kmフリーでは151名が走った中、Y・Kさんが5位、K・Jさんが6位となり、全国大会で入賞者2名を出しました。女子3kmフリーでは91名が走った中、T・Aさんが7位で全国大会で入賞に輝きました。最終日の男女リレー競技では、Y県男子チームの1走をK・Jさん、3走をY・Kさんが快走し、県チーム4位に貢献しました。山形県女子チームでは、1走をK・Kさん、3走をT・Aさん、4走をC・Mさんが走り、県チーム7位入賞に貢献しました。

16日の夜は、改善センターで家庭教育推進等の会議でした。子どもたちが、“これまで以上に幼くなっている”事例が報告されました。いっぽうで、小学校の図書館にきて「ほっとするー」と言った児童の話も紹介されました。学校はやっぱり、ほっとするところが少ない場所であり、ほっとする気持ちを家庭でも、学校でも感じさせてあげるにはどうしたらよいか、そんなことを考えて夜の会議に参加していました。

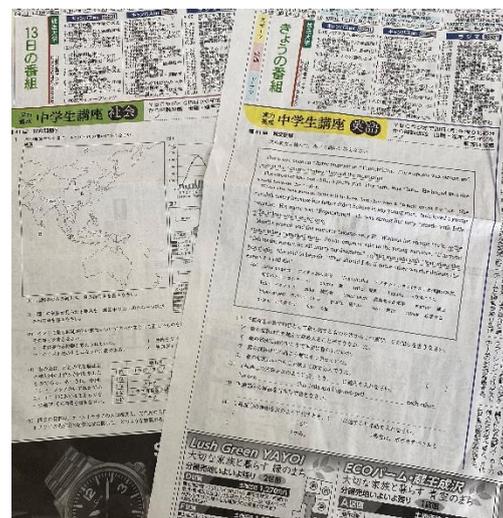
二人で挑んだ受験

毎日歩道で挨拶運動をしているわたしと目が合うと「おはようございます」とはっきりと挨拶を交わしてくれる男子生徒のH・Kさん。時々、一緒におしゃべりしながら玄関先まで歩くこともあります。以前、校長室でH・Kさんと話をしたとき、「僕は、料理をつくるのが好きだ。」と話してくれました。それ以来、「料理人になってみたら？」と会うたび、わたしは彼に勧めています。「休みの日に、料理っていうほどではないですが、家でこんなものを作りました。」と、凍えそうな寒さの中でも歩きながら話をしてくれました。人の夢は儚（はかない）いものです。だから思い通りになるとは限りません。でも、生きている今、何か興味があることを見つけたなら、それだけで夢の種を育てることはできます。夢の種は将来何に化けるかわかりません。

彼女は、ものづくりが得意で、自分の部屋をDIYするのが日常でした。部屋を100円ショップで買ってきたものを利用して、季節ごとに装飾を変えて模様替えをします。中学校のときは、「保育士さんになりたい。」それが彼女の夢でした。中学3年になると、受験生となりました。中学校の部活も引退した頃から、下校途中に県立病院に行って時間を潰し、そこから帰宅します。学校に見つかる「寄り道した」と叱られるかもしれませんが、でも、母親が入院しているから、いつも下校途中に寄ります。夏は自転車で、冬は歩いて通っていました。

仕事から帰ると、彼女は自分の部屋で寝ています。受験生だから困ったなあと思って、ある日、「朝5時に起こすから一緒に勉強しよう」と提案しました。仕方なさそうに彼女は了解しま

した。翌日から朝5時前に起きて冷え切った部屋のストーブに火を入れ、装飾で賑やかな娘の部屋で寝息を立てている娘を起こします。そして、外のポストから今配られたばかりのY形新聞を持ってきて、二人っきりの茶の間に勉強を始めます。Y形新聞には毎日『中学生講座』という高校受験用の問題が掲載されています。毎日、その問題を解くことが父娘の日課になりました。



受験当日は、父親の手弁当を持って、試験会場に向かいました。結果は、なんとか、志望高校に合格しました。母親も、入学式には参加して、父娘二人で受験を乗り越えたことを褒めてくれました。

高校生活を満喫しはじめた頃、彼女は、「わたしは保育士ではなく、看護師になる。」と言いました。なぜ夢が変わったのかは、父親にはなんとなくわかりました。母親の病状が良くなく、お見舞いに行く度に弱っていく姿、そして懸命に看病してくれる医療関係者の姿。いつか母親が大きな病院に通院する時、車窓から見えたおしゃれな建物の看護大学を見て、母親から「〇〇ちゃんも、こんな大学に入れたらいいね」と言われたこと。彼女の夢の種はこんなところから育まりました。そして高校3年生になると、その看護大学を目指しました。

父娘は、もう、一緒に受験勉強することはありません。少し大人風に装飾された、彼女の部屋にこたつを敷いて、1人で黙々勉強していました。時々、部屋を見に行くと、こたつの中で寝ていましたが、別に父親は起こすことはしません。母親が亡くなった後は、二人っきりの生活で、父親の仕事は毎日の朝のお弁当づくりでした。それくらいしか応援できませんでした。

大学の合格発表の日、祈るような思いでしたが、結果は、“不合格”でした。

「しかたないよね」と彼女は笑っていました。大学ではなく、同じ市内にある看護専門学校に通うことにしました。学校近くのアパートを借りて、引っ越しをする準備をしていた時、父親の携帯がなりました。3月30日でした。

「〇〇さんを、補欠合格とします。」と、電話の向こうの大学関係者の人が言いました。

父親はびっくりして、娘に連絡します。

「お母さんからのお祝いだね」とうれしそうに言って、車窓から母娘の二人で見た大学に入学しました。

それがわたしの家族です。

きりとりせん

ご意見・ご感想をお願いします。